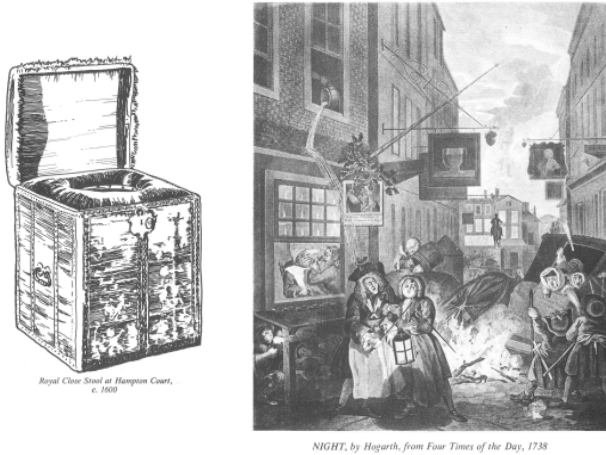




日本の便所・ヨーロッパの便器
 日本とヨーロッパでは住宅の便所の成り立ちが全く違う。中世ヨーロッパの都市住宅では便所はなく、寝室に「おまる」が置かれていた。汚物は窓から道路に捨てられていた。この寝室に置かれた「おまる」に排水管、給水管が接続されて、今日私たちが使用している水洗便器となった。ヨーロッパでは便器はそれぞれの寝室に置かれたものであり、共同の便所という場所は存在しなかった。水洗便器ができてからも、ヨーロッパの住宅では、寝室と便所は一体であり、各寝室に便所が同じ数だけ存在している。お客さんが使用する便所は当然なく、ほかの家を訪問したときは便所を借りてはいけないうというエチケットもここから発生している。

図1 中世の「おまる」と汚物が窓から道路に捨てられている様子



ため、家の中のためにおく構造となり、共同で使う便所が家の端に作られることとなる。

高齢者住宅はヨーロッパ方式
 このように日本の便所は、本来家族が共同で使うものであり、各寝室に便所が作られることはないが、高齢者住宅では、個人住宅にしろ、共同住宅にしろ、個人の居室に便所が付属することが普通となっている。

高齢者住宅の便所は、日本式の共同便所方式ではなく、ヨーロッパ式の個人便器方式を採用しているといえる。

便器・ポータブル便器・おむつ
 高齢者の排泄・排便の処理は、便器、ポータブル便器、おむつの順に変わっていく。

便器を使われる方にとっても、介護をされる方にとっても、この「便器」と「ポータブル便器」「おむつ」の間にある距離はほんとに大きなものである。

ポータブルトイレの進化
 ポータブルトイレも高齢者の増加とともに様々な工夫が凝らされ、従来の病院などで使われていたものとは全く違った製品になっている。パナソニックのポータブルトイレ「座楽」では、ポータブルトイレでありながら、温水シャワーでおしりを洗浄できる機能が付いている。問題となる脱臭には消臭液で対応するが、汚物の処理は従来通り、介護の方がおこな

図2 メーカー別ポータブルトイレ比較表

	TOTO(株)	アルピクス(株)	パナソニック電工ライフテック(株)
商品名	水洗ポータブルトイレ	ラレット	座楽
画像			
定価	505,150円(税別)	247,000円(税別)	128,000円(税別)
特徴	汚物を粉砕してポンプで小口径管へ圧送する技術を用いて、下水管まで汚物を流せるポータブルトイレ。	特許申請済みの粉砕圧送装置により、水洗式トイレが簡単な工事でお部屋に設置できる。	排泄物は、介護者が処理を行う必要がある。温水シャワー、暖房便座、温風乾燥機能がある。

わなければいけない。

6年前から水洗ポータブルは存在する。

ポータブルトイレの欠点である臭いや排泄物の処理を解決するには、水洗便器がベッドの近くまで移動できればよいという発想は誰でも思いつく。しかし、今の日本ではそのような製品はあまり見かけない。

ところが、2003年からすでに水洗ポータブル便器に関する動きは同時にいくつか起こっていた。

POTOでは2003年の「第30回国際福祉機器展」に開発中の「水洗ポータブルトイレ」を参考出品している。方式は汚物を粉碎して下水管まで小口径管で圧送するものであり、この技術によれば部屋のどこにでも水洗便器を置くことができるようになる。

2003年には同じような方式で水洗ポータブルトイレを発売したメーカーがある。新潟のアルビクスという会社が、「ラレット」という水洗ポータブルトイレを発売した。

このあと2005年には石川県の株式会社アムが水洗ポータブルトイレを発売した。この便器は便を粉碎せず圧送するもので方式は全2社と違うが、患者への利便性は同じものである。

売れていない「水洗ポータブル便器」

この北陸の2社から発売された製品は、その効果にもかかわらず、あまり売れていない。いずれも月に10台も売れていない。月に数台という時もあるらしい。

POTOは試験発売

TOTOは2003年に参考展示を行ったが、その後試験販売を開始した。特養などの施設に製品の内容を説明し、理解を得たところのみ発売している。この理由は明確には答えてもらっていないが、移動することによって、取扱いによっては問題が起こることを想定されているかもしれない。

POTO製品が現在どの程度売れているかは、答えてもらえなかったのでわからない。しかし正式発売に踏み切るといっても話もあり、期待がもたれる。

「水洗ポータブル便器」は使える製品

有名でないメーカーの製品であり、またPOTOという大企業の製品は試験販売の段階であるが、この「水洗ポータブル便器」は高齢者事業にとって、具体的に検討に値する製品だと判断している。TOTO製品が五十万円前後と一般の便器に比べかなり高い値段設定だが、本格的に取り組めばアルビクス程度の値段に下げることが期待できるだろう。高齢者事業者としては、最初からすべて水洗ポータブル便器を採用するのではなく、オプ

ションとして体の変化に応じて便器を変える方式を採用することが現実的である。

建物による可変対応

体の変化に応じて対応する便器を取りかえるという発想とは別に、私は建築からの対応も提案している。

私の設計した特養に、ベッドを居室内部の真横まで移動している方がいた。その方は数歩は歩けないが、一歩なら手すりにつかまって歩ける。「おまる」は使いたくないので、トイレの横にベッドを移動させるとかご自分の力でトイレを使っておられた。

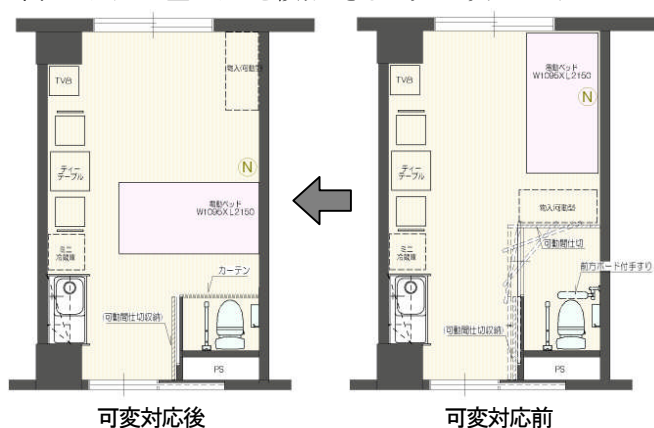
私はこれを建築的に解決すれば、かなりの高齢者が体が不自由になってもトイレをご自分で使えるのではと考えた。それでトイレの壁と、ドアを移動できる方式を工夫した。体が不自由になった時に、「おまる」に頼らなくても生活できる。

この方式は、まだ実現していないがコス

図3 壁移動後の室内



図4 トイレの壁とドアを移動できるように工夫したプラン



ト上昇も少なく、これからの設計に採用していくことになる。自分で排泄排便を行えることは高齢者の生活に大きな影響をもたらす。このトイレ問題は事業者にとって避けて通れない項目である。

砂山憲一

すなやま・けんいち

1972年 SANT-LUC DE TOURNAI 建築学校(ベルギー)留学、1975年京都大学工学部建築系学科修士課程修了、1981年 橋ゆう建築設計設立。



主な著書に『医療・介護・建築関係者のための高齢者の住まい事業企画の手引き』(学芸出版社)。最近の執筆に日経ヘルスケア別冊 拡大するシニアリビングVOL3『あなたの病院は増改築できますか? 建築家から見た療養病床転換の問題点』、『病院のための高齢者住宅開設マニュアル』【老人保健施設部分担当】(ともに日経BP社)